



リカンを手にした年配の女性理髪師は、何ミリにするのかとか何も考えていないこちらが困る質問をいくつかし、その適当な答えを危ぶんだか、「奥さんに叱られませんか」と念を押してきた。もちろんちゃんと答えてあると答えたが、妻には「かもしれない」と濁して伝えているので、厳密に言うとうソだ。まあおそらくギョツとはしても憤慨まではしないだろう。

バリカンのモーター音がひびいて、バサツと髪の毛がケープの上に落ちた。鏡に映ったばくに向かつて理髪師が言う。

「これが3ミリです。どうしますか？」

煩いの元を捨てるのだ。3ミリ5ミリに違いなどない。最少1ミリを試みるに如くは無し。どうせまた伸びるので。理髪師は、その長さできれいに刈りそろえるのは本当は難しいのだ、と自身の技術を誇った。

刈ってしまったと、目の前の鏡に所在なげな坊主頭が浮かんでいる。人の目などは気にならないが、自分が馴れるまでに少し時間がかかるかもしれないと思つた。実際、二三日はチラツと鏡が視界の端に見えたと きなど、自分だと気づくのにタイムラグが生じた。人の 様の反応は、塾の保護者がびつくりして「先生、 頭つ」とか「どうされたんですか？」と聞いてきた程

度だった。子どもたちは、じいさんの頭がどうなっていたかなど記憶にもないだろうし、変化していいよといまいとどうでもいいようだ。誰一人、何を言う子もいなかった。まったく煩いというのは自分が作り出している幻影に過ぎない。

刈った日にネット通販で電動バリカンを購入し、以後は自分で週に一回刈っている。初回こそ妻に頼んだが、刈り残すサイズを決めてただ機械をずりずりと滑らせばいいだけなので、いたって簡単だ。さらに入浴前に風呂場で刈れば、シャワーでさつと流して片付けの手間もかからぬことなどを発見し、こと頭髮に關しては最終解決を見た。ただ、課題が一つあって、襟足がうまく処理できない。自分では見えない上に、まばらに生えているせいで、バリカンをかいくぐつてどうしても残ってしまう。

指先でこの難物をつまんでいると、ふと石垣りんの「花嫁」という詩が浮かんできた。りんさんが、銭湯で「明日嫁に行く」という見ず知らずの女性の襟足を剃つてあげる話である。貧しくとも気高くある人との一瞬の交錯が輝くばかりに美しい。かたや、坊主頭のじじいのそれだから、飛躍が過ぎるのだが、若いころ一読刻み込まれた一編への通い路が、意外なところにあつた。

老い老いに

## 木幡智恵美

14

### 編

集長が隠岐へ渡つてから、夕焼け通信に隠岐色が濃くなっていく。もともと書き手も読み手も編集長の求心力によって夕焼け通信に吸い寄せられてきたようなものだから、その編集長が行くところに人は集まり、様々なことが展開されていくわけだ。一九九五年の十月には近代日朝関係史等の研究者である尹健次氏(当時神奈川大学教授)が隠岐に招かれ、講演録が夕焼け通信に掲載される。十一月にはYさんたちが立ち上げた劇団「たいよう」の初演があり、その後各地で公演されていく。そして、年度が新たになった一九九六年四月には、伊藤ルイさん(大杉栄・伊藤野枝の四女)を隠岐に迎えることになり、その講演録も掲載されていく。さらには、Yさんが勤める施設他、隠岐島後地区の障がい者に関わる五者で構成する「みんなであつくる発表会」がワークショップを企画し、八月の三十日から九月一日まで開かれることになった。絵画、書、陶芸、身体表現のワークショップにその道の達人たちが講師陣に迎えられ、何と特別講師には「絵本を読む」でも取り上げた田島征三さんを迎えるという。憧れの絵本作家が隠岐に来られるということで、私の胸は高鳴つた。

隠岐に吸い寄せられていったのは私も同様で、一九九五年の夏には息子たちを連れて「ひまわり号」に乗り島へ渡つた。編集長が竹島を題材にした「ある小さな小さな島の物語」には心惹かれるものがあり、絵を付けて絵本にしている。その絵本を、あろうことか田島征三さんに見てもらおうなどと大それた考えまで心の中に芽生えていた。内地留学した際Yさんが勤務する施設を共に訪れた友人を誘い、ワークショップと一緒にいこうと決めた。祖父が知夫里島出身で、大学の卒業旅行に部活動の仲間と一度その知夫里を訪れたことがあるが、隠岐がこれほど近い存在になつてしまふとは。夕焼け通信の力にほかならない。

隠岐を巡る動きがあつた三年目から四年目に移る際、またしても社員が異動になつた。松江支部の要であつたTさんだ。新天地で夕焼け通信を広めてくれるのは喜ばしいが、Tさんに頼りつばなした私には、これから本格的にパソコンを使いこなさねばならなくなつた。

30代フリーター 兵庫県知事選で齋藤元彦が再選された。

年金生活者 不信任決議で彼を失職させた議会の意思を全否定する選挙結果は、19世紀なかばのフランスで軍事力によって議会を解体し、独裁権力を握ったルイ・ナポレオンのクーデタの無血版のように見える。

ルイは、1848年の革命で王政が倒れたあと成立した第2共和政のもとで大統領に当選した。しかし、議会では少数与党で、政治の主権を握れなかった。それをくつがえすために決行したクーデタはその直後の国民投票で92%の支持を集め、1年後の再度の国民投票を経て彼は皇帝に即位した。

ルイが国民を代表する議会を無視したにもかかわらず、国民の支持を得た理由を、マルクスは「フランス社会で最も人数の多い階級」でありながら、議会の中に自分たちの代表を持たなかった「分割地農民」の代表者になったことであると分析した（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』植村邦彦訳）。

30代 その選挙結果が県民のためになるとは限らない。橋下徹は内部告発者を処分した齋藤を権力を持つ者として不適格と批判している。

年金 もう一度マルクスの言葉を借りる。

「しかし、フランス国民の大多数を伝統の重圧から解放するには、社会に対する国家権力の対立が純粹なかたちで現われるようにするには、帝政のもじりが必要であった。分割地所有の零落がすすむにつれて、そのうえに建てられた国家構築物は崩壊する。近代社会が必要とする国家的中央集権制は、封建制度との対立のなかできたえあげられた軍事的・官僚的統治機構の廃墟のうえにのみ成立する」（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』村田陽一訳）

ルイ・ナポレオンを「帝政のもじり」と皮肉るマルクスは他方で、フランス国民を封建制の残滓から解放するにはその「もじり」が必要だったとして、ルイの独裁に一定の評価を与えている。齋藤に対して「大阪維新のもじり」と嘲笑し

齋藤の再選に寄与したのも、議会に自分たちの代表者を持たない有権者だったと思われる。分割地農民が文字通り「分割」された土地で孤立した生活を送り、横のつながりを持つことができず、そのために自らの代表者を持たなかったように、齋藤に投票した有権者の多く、とりわけそのなかの若い層もまた横につながることでできない孤立を抱えていたと推察される。

30代 19世紀フランスの農民と今の日本の若者とは違いが大き過ぎる。

年金 マルクスは次のように言っている。

「分割地農民は膨大な大衆を形成しており、その成員はみな同じ生活状況にあるが、相互に様々な関係を結ぶことがない。彼らの生産様式は、彼らを相互に交流させる代わりに、互いに孤立させる。この孤立は、劣悪なフランスの交通手段と農民の貧しさによって助長される」（同）

「みな同じ生活状況にあるが、相互に様々な関係を結ぶことがない」のは、今

ながら、しかし「もじり」は必要だったと言いかもされない。

兵庫県の知事は齋藤の前任者まで4代、59年にわたって、内務省か自治省出身の副知事が後継指名されて次の知事になっている。これについて次のよ

日本の若年あるいは壮年の現役世代が置かれた状況に似ていないか。戦後のある時期まではそうではなかった。企業はかつての農村に代わる共同体の役目を果たし、そこで働く労働者やその家族は「相互に様々な関係を結」び、「互いに孤立」することはなかった。

彼らはそうした共同体を通じて政治ともつながっていた。選挙になると、労働組合から、あるいは企業の経営者から、社会党あるいは自民党への投票やそのための運動を呼びかけられ、多くはそれに応じた。積極的ではないにしても、彼らは議会の中に自分たちの代表者を持つていた。

だが、労働組合の組織率は大幅に低下した。ひところ目立った企業ぐるみ選挙も、公選法が厳格化され、多様な価値観の尊重が叫ばれるようになって減った。議会の中に自分たちを代表する政党を持つ労働者は少数派になった。言い換えれば、今の日本の政党全体が潜在的な少数派になったと言える。兵庫県知事選はそれをあらわにした。

うな指摘がある。

「職員にとつては行政的にとても安定した政権なんです。ナンバー2への禪譲なら、政策は基本的に『継続』ですし、職員の評価軸もぶれません。なにせ、前の知事が引き立てた幹部がそのまま残り、その幹部たちが評価する職員が次の幹部になっていくわけですから、仕事の仕方も迷わずに済むわけです」（元サンデー毎日編集長・鴻永秀一郎）「知事の座を追われて終わる」（『劇場』）

その体制の裏で既得権益が蓄積されていったことは想像に難くない。その「伝統の重圧」から県民を解放し、自治体権力がそのもとにある現実の社会と対立するまでに至った実態をあらわにするには、「伝統」の担い手の一方だった議会の意思をひっくり返す齋藤の再選が必要だった。たとえ彼が法の支配を免れようとする独裁的な振る舞いをする人物だとしても。マルクスはそう考えそうだが。

ニュース日記 948  
中村 礼治

## 失職知事のブリュメール 18日